劉備と「義」

――『三国演義』における儒教思想――

森　村　森　鳳

始めに

日本で「三国志」と呼ばれている本は、二種類ある。一つは晋陳寿が著した歴史の書の『三国志』である。もう一つは小説で、本来の名前を『三国演義』という。吉川英治が小説「三国志」を世に出して以来、数多くの小説や漫画、アニメ、ゲームなどが作られるが、それはほとんどが『三国演義』を元にしている。それは『三国志』に異なるテキストである。『三国演義』とは中国の四大古典名作の一つで、元末、明初羅貫中が書いた歴史小説である。中国では、『三国演義』には多くの読者がいるが、『三国志』は普通の歴史の本と同様、一般の人にあまり読まれない。

本論は文学鑑賞の立場から、『三国演義』を基にして、多くの人に『三国志』として親しまれる作中の人物の面白さを味わいながら論を展開していきたいと思う。

劉備とは『三国演義』の中での「義」の代表的な人物である。

「仁・義・礼・智・信」を強調する儒教思想の中核は「仁」という漢字の語源にも伺える。二に人、「人」と「人」で構成された「仁」は、人間同士の愛を表す。すなわち儒教思想の中核は愛である。二千年以上にわたる中国伝統文化は、愛を重んじている。君臣の愛、君民の愛、親子の愛、兄弟の愛。さらに家族、友人、民族、国、すべての人へと広がっていく。

「仁・義・礼・智・信」のなかでの「義」の意味もまたその語源に伺える。上に「羊」、下は「我」である。羊は飾るものである。義は自我を厳かに保つことを意味する。すなわち自己の人格を美しくする。その美しさの基準は、儒教思想である。義は儒教文化の雰囲気の中で育てられた中国の知識人にとって、もっとも大切なものである。それは個人的なレベルにとどまらず、一種の民族精神として、代々と伝わって、民族心理の深層部に沈殿している。また表層的な観念や感情と、倫理道徳にとどまらず、感覚の隅々までにしみ込んで、無意識心理までに内面化される。劉備の身に現れた義はそういうものである。「義」は劉備の人格的な魅力の核であり、芯であり、劉備の人生を貫くものである。それは劉備に任侠的な風格と男くさい魅力をもたらした。

第1章　乱世と人生

三世紀中ごろの中国。四百年も続いた漢王朝は、衰退の途をたどることになった。宦官[1]が政治に参与することにより、政治が乱れ、混乱した。『三国演義』の時代背景は、漢王朝の衰退期から、蜀・魏・呉の三国鼎立時代を経て、晋に統一されるまでの約百年（紀元184－280）に及ぶ歴史である。「三国」とは、漢献帝初平元年（紀元190年）から晋武帝太康元年（紀元280年）の九十年の歴史である。

この九十年間は乱世である。乱世は無数の命を戦火の中に飲み込む世界である。しかし、「沧海横流、方显出英雄本色」。乱世こそ、真の英雄を浮かばせる時代であり、英雄輩出の時代である。乱世は英雄のエネルギーを最大限に燃焼させる時代であり、最も陽剛の気があふれる時代である。乱世を沈め、平和の世界へと導くという時代のリーダーの出現を待ちわびている。この時代は、そのような人の力を期待する。時代の期待に応じて、三国の歴史舞台に無数の英雄が争って登場していた。その中でリーダーに

なったのは、蜀の劉備・魏の曹操・呉の孫権と言う天下を三分にした英雄たちである。彼らは自分こそ、乱世を沈め、平和の世界へと導くという時代のリーダーにならなければならないという気持ちで、争った。彼らはそれぞれの魅力を持ち、天下を狙い、自分の持てる能力、条件を最大限に発揮して、精一杯にがんばった。が、三人ともに天下を取ることはできなかった。野望を抱き、努力し、その上であらゆる条件を乗り超えていくのだが、最終的には、統一権力の座につけなかった。彼らはそれぞれリーダーのリーダーたるゆえんを備えていたにもかかわらず、誰も時代のリーダー――皇帝にはなれなかった。結局、それぞれ悲劇的に人生の幕を閉じた。『三国演義』の最大の面白さは、ここにあるであろう。並々ならぬ頑張りと、その頑張りぶりを裏切る結果。この三国時代のリーダーたちの矛盾するように思われる共通の運命に、人々は底なしの悲しみ、どうしようもないさびしさを感じながらその悲劇的な宿命に心惹かれていく。なぜであろうか。ここには一つの人生の二律背反が潜んでいる。それは個人の努力と時代、環境の矛盾である。人間は誰であってもそういう人生の矛盾から抜け出すことができない。夢を抱え、人生の舞台に上る。夢を実現するために、最大限に自己の能力や条件を生し、輝こうとするが、それは常に自身の限界や時代や環境などによって抑圧される。そこに、自己を拡大しようとする内発的な力とそれを抑圧する外在する力が衝突する。乱世は、そのような二つの強力な力がぶつかり合う時代である。激しい衝突の中に生じる緊張する対立関係からさまざまな人生ドラマを生じる。『三国演義』の英雄たちの人生ドラマはまさにこのような激しい衝突の中に弾き出した火花である。劉備は、その無数の火花の中で最も色彩を放った人である。

九〇

第2章　劉備の人格の魅力

1　出身

波乱に満ちた三国時代を舞台にする『三国演義』を縦糸のように貫いているのが、劉備の人生である。『三国演義』の主人公は前半は劉備であり、後半は孔明であるが、孔明の「出師表」に見られるように孔明を動かす力は孔明の劉備に対する重い気持ちである)。

劉備は不思議な魅力を感じられる人物である。出身から見よう。『三国演義』でこのように描かれている。

「那人不甚好読书；性寛和、寡言語、喜怒不形於色；素有大志、専好結交天下豪傑；生得身高八尺、两耳垂肩、双手過膝、目能自顧其耳、面如冠玉、唇若涂脂；中山靖王劉勝之後、漢景帝閣玄孫、姓劉備、名備、字玄德。昔劉勝之子劉貞、漢武時封涿鹿亭侯、後酌金失侯、因此遺這一枝在涿県。玄德祖父劉雄、父劉弘。弘曽举孝廉。亦賞做吏、早丧。玄德幼孤、事母至孝；家貧、販履織蓆為生。家住本県楼桑村。其家之東南、有一大桑树、童童如車盖。相者云：、“此家必出貴人。”玄德幼時、與郷中小児游戯於树下、曰：、“我為天子、当に此車盖”

性格は、學問をあまり好まず、温和で，口数は少なく、喜怒を色に現さない。大志を抱き、天下の豪傑と交わりを結んでいる。この性格は大人物の特徴である。容姿は、身の丈、七尺五寸（172.5センチ）であり、两の耳は肩まで垂れて、手を伸ばせば、膝下に届き、目はよく自分の耳
八九 を見、顔は、冠の白玉の如き、唇は紅をさしたようである。姿は、面相学においては、「真命天子」という帝王の相貌である。

劉備の家は、漢の景帝の子、中山靖王劉勝からでたと言われる。しかし、涿の知事であった祖父や父と早く死に別れたので、劉備は貧しい家

計を支えるために母とともに草鞋を作り、蓆を編んで暮らしていた。

劉備の家の東南、一大桑樹があり、遥かに望めば亭々として馬車の傘のようである。相師が言ったことがある。

「この家からきっと貴人が出られるでしょう」

劉備が幼い時、村の子供とその木の下で遊んでいて

「われは天子になって、この車にのってみせる」

この劉備の出身についての一説は、次の評価がある。

「劉備の家は、漢の景帝の子、中山靖王劉勝からでたと言われる。つまり、遠くさかのぼれば、漢の高祖劉邦の血筋につながっていたことになる。これは劉備の金看板になることは疑いない。かれが頼っていった先々で、丁重に遇されたのは一つにはそういう理由あった。だが、血筋とか家柄がいつまでも通用するほど、乱世は甘くない」(2)

確かに、正統思想に支配された古代中国では、劉備の出身は劉備の人望の大きな要素になる。筆者はこの論に異議はない。この論を踏まえて、この一説が文学表現の面での意味、劉備という人間像においての意味に注目したいと思う。つまり、漢の景帝の子孫であることは、「忠君」思想を重んじる儒教思想の「義」においては劉備が時代のリーダーを担うことを正当化する。劉備の努力は、中国人の伝統観念において、「忠」であり、正義である。それによって、曹操との戦いの中で、劉備は正義の場に置かれ、ライバルである曹操が非正義の場に置かれる。であればこそ、曹操よりも、孫権よりも、自分こそ時代のリーダーにならなければならないという使命感は、劉備の人生を支える根源的な力になっていたと思われる。

2 苦難に満ちた人生の道

このようにして、劉備は乱世の舞台に上った。ときは、184年、28歳であった。裸一貫の出発である。出発時の条件はもっとも悪かった。孫権のように父兄から残された豊かな地盤もない。曹操のような軍事的な才能も、社会地位もない。人生の道も苦難に満ちており、浮き沈みの連続である。「髀肉之嘆」[3]は劉備のエピソードから生じる言葉である。荊州の劉表のところに身をゆだねたとき（201－208年）のことである。

あるとき、便所から帰ってきた劉備が涙をためているのを見て、劉表が尋ねると、劉備は次のように答える。

「備往常身不離鞍、髀肉皆散。今久不騎、髀里肉生。日月蹉跎、老将至矣。而功业不建、是以悲耳。」（私は常に馬を乗りまわしていたため、髀肉は全くありませんでしたのに、ここしばらく馬に乗らずにいたので、髀肉がついてしました。月日のたつのは早く、老いも間近迫っているというのに、いまだに名を挙げることもできず、悲くなったものにございます）

大志を抱きながら、成すこともなく日を送っている劉備の嘆きである。このときの劉備は47歳である。「人生七十古来希」（七十歳まで生きる人は古来希である）という古代では、すでに老境に近い。ライバルの曹操がもはや中国の北部の全土を支配下に置いたのに対して、劉備のほうは、目前の勢力を形成できなかった。よるべき地盤も持たない。（劉備自身の言葉で言えば、「立錐の地さえない」とのことである）さしたる戦功もない。劉備に二十年の人生は、戦に敗れ、敵に追われ、転々と流寓の日々であった。この「髀肉之嘆」という言葉はまさにこの二十年の人生の縮図である。

3　逆境に耐えうる力

このようにして、大志を抱えながら、それを実現するに必要なものを持てないうちに、年齢を重ねている。他の人なら、あきらめて人生を投げ出してしまうであろう。特にプライドの高い英雄ならなおさらであろう。さまざまな人のところに身を寄せ、敵と見方のあいだを逃げ回るのは耐えがたいことであろう。しかし、劉備は人生をあきらめなかった。「忍辱負重」（辱を忍し重さを負い）ながら、敗れても敗れても戦い続ける。夢は渺茫であってもそれを抱えて人生の道を一歩一歩と拓き続ける。波のように、次から次へと押し寄せてくる逆境を黙々と乗り越えていく。不運逆境の日々の中でも、終始柔和でわが身を腐らせなかった。逆境にあって涙して、ちょっと落ち込んだときもあるが、心をすさませることなく、世をすねていない。そういう打たれ強さが、どこから来るものか。

群雄混戦の時代に、劉備はつぶされなかった。乱世の舞台に主役として、しぶとく残っている。とうとう、自己の根拠地を持ち、根拠地を次第に拡大し、蜀を建国し、曹操と孫権に対抗する勢力を築き上げた。それはなぜか。

劉備は他者より不利な条件を補って余りあるものを身につけていた。それは、内面化された「義」である。その義は、劉備の人格を貫き彼の人生を支え、彼の苦境を乗り越える力になった。

人格の魅力は劉備の字「玄徳」に現されたように、微妙で奥深い。人々は劉備に接すると思わずに彼の何かに吸い込まれ、惚れてしまう。『三国演義』には劉備と言う人間に魅了させ、傾倒する男たちが次々と現れた。義を根底にする劉備の人格の特徴は、『三国演義』の言葉で言えば、「弘毅寛厚」である。『三国志』にも、「弘雅有信義」（袁紹評価）という言葉がある。すなわち、胸が広い、懐深い・包容力があり、意志が強く、忍耐力があり、寛容で謙虚である。感情が深く善良で、篤実である。弱さを助け、

強さをくじく。高雅で信義を重んじるというところにある。

第3章　義によって結ばれる劉備の集団

それらの徳の元は義である。「義」は劉備の人格にしみじみと染み込んでいた。戦略に長けていたわけではない劉備は環境や、人々から生きていく力を与えられる。劉備は50代半ばになって、ようやく蜀の地に目前の勢力を築くことに成功する。それはリーダーシップを発揮したというより、部下のがんばりによるところが大きかった。だが、その部下たちのがんばりを引き出したものは、劉備を貫いている義なのである。

例えば、関羽、張飛、趙雲、孔明、みんなその時代の並々ならぬ優秀な人材であり、強い個性のある者たちである。彼らは、みんな劉備にほれ込んだ男である。劉備は彼らとそれぞれ強い絆で結ばれた。

1　劉備と関羽、張飛 —— 桃園三結義（桃園の結義）

劉備と関羽、張飛は三人桃園で杯を交わして義兄弟の契りを結ぶ。

“念劉備、関羽、張飛、雖然異姓、既結兄弟、則同心協力、救困扶危、上報国家、下安黎庶、不求同年同月生、只願同年同月死。皇天後上、實鑒此心。背義忘恩、天人共戮。”(4)

（ここに劉備・関羽・張飛は、姓は異るといえども、兄弟の契りを結びし、上は心を同じくして、協力し合わせ、困苦を救い、危を扶け、上は国家に報じ、下は民を安んぜん。同年同月に生れんことは求めず、願わくは同年同月に死せん。天地の神よ、われらのこの心をご照覧あれ。義に背き恩を忘るならば天人ともにこれを誅滅せん。”）(5)

と誓い合った。このようにして、劉備の集団は義から出発した。以来、張

飛と関羽は熱烈に劉備を敬愛し続けた。関羽も張飛も誇り高い、時代の一流の英雄であるが、彼らはひたすら劉備にだけ忠誠を尽くした。

2　劉備と趙雲

趙雲、字は子龍。常山国の出身。はじめ公孫瓚のもとにいたが、劉備に出会ってから、劉備の人柄に引かれて、臣下として従う。以来、二人は互いに義によって、信頼関係を深める。義で結ばれた二人の関係をもっともよく表しているのは長坂の戦いの場面である。

劉備が長坂の戦い〔長坂の戦いについて後で詳しく述べる〕で曹操に大敗したとき、趙雲は曹操軍にとらわれた劉備の妻と息子阿斗をただ一騎で救い出した。

そのときの趙雲の姿について作品の語り手はこのように歌っている。

血染征袍透甲紅、当陽誰敢来争鋒！古来衝陣救危主、只有常山趙子龍[6]。

（血染の征袍　甲を透して紅なり、当陽に誰が敢て鋒を争わんや！古来　陣を衝いて危うき主を扶くるは、ただ常山の趙子龍あるのみ。）[7]

戦衣が血飛沫で真っ赤になった趙雲は劉備の元に来て、胸当てを開いて阿斗を両手でそっと劉備に差し出した。劉備は受け取るやいなや、阿斗を地面に放り投げ、

「お前ごとき小僧のために、もう少しで大将を失うところであった。」

と、言った。趙雲はあわてて阿斗を地面から拾い上げ、泣きながら拝み、

「雲雖肝脳塗地、不能報也」[8]

「わたくしは肝脳、地に塗るとも、此のご恩に報います」[9]

といった。

肝脳地に塗るとは、肝も脳も土まみれになる意。むごたらしい死に方をすること。

このことを、劉備が人心をとらえるためのパフォーマンスとみるものもあるようである。「劉備摔孩（ちのみご）子、刁買人心」という諺もあるが、私はそうは受け止めない。

趙雲（部下）＝義と阿斗（息子）＝利、この内の一人を犠牲にしなければならないとき、どちらを選ぶか。劉備の姿勢は、彼の人格による必然的な選択である。内面化された義のおのずからの流露である。それは人をごまかすパフォーマンスとは本質的に異なる。であればこそ、趙雲はそれを深い恩として受け止め、劉備の前にひざまずき、泣きながら、「わたくしは肝脳、地に塗るとも、ご恩に報います」という肺腑を衝く言葉でかえしたのである。趙雲の姿には、反射的に劉備の人格の力を示しているといえよう。その言葉は何を意味するか。この人生は劉備の恩に報いるに尽くす。たとえ、そのためにむごたらしい死に方をしても、惜しくないとのことである。

日本語では「わたくしは肝脳、地に塗るとも、此のご恩に報います」と言うふうに翻訳されたが、中国語の「雲雖肝脳塗地、不能報也」という原文は「雲は肝脳を地に塗るとも、ご恩に報いることはできない」という意味合いを持つ。この中国語の原文は、さらに、恩はあまりにも重く、たとえ、劉備のために戦ってむごたらしい死に方をしても、まだその恩に報いるには及ばないとの意味がある。

劉備に忠誠を尽くす趙雲。趙雲の忠誠に感動し、その大変さを痛みとして感じられる劉備、劉備の気持ちを恩として深く受け止める趙雲。劉備の人格と、彼の人格の力に生かされる趙雲の優れた人格の出会いである。

3　劉備と孔明 —— 三顧の礼

孔明がまだ新野に住んでいたとき、劉備が訪れ、ぜひとも軍師に迎えたいと懇請した。劉備が関羽、張飛を伴って三度も孔明の草廬をたずね、礼儀を尽くして孔明を臣下に迎え入れた。劉備がわざわざ雪の山の中に孔明を訪ね、三度目にようやく会えたときにも、劉備は昼寝中の孔明が目覚めるのを待っていた。

徐庶から孔明を推薦されたとき、劉備は徐庶に「孔明を呼びよせてくれるよう」頼んだ。が、徐庶は「孔明は呼び寄せることのできる男ではありません。どうか将軍のほうからお出向きください」と言った。劉備はその言葉を素直に受けて礼を尽くしたのである。

この三顧の礼に見られる劉備の人間性の特徴は次のようにまとめられる。

(1)　謙虚

心の広さによるものである。虚懐若谷。自身の不足を自覚する心の余裕。他者の長所を認める余裕。心が広く、常によいものを入れる余裕を持つ。それに対して、傲慢は、心の余裕がない由来である。例えば「井底之蛙」ということばに表されたように、心が狭いならば、他者のよさを認め、自身の不足を自覚する心の余裕はなくなる。自己のよさしか見えない。自己満足に陥り、傲慢になりがちである。

(2)　自身の人格への自信

自分の能力に自信のある人ほど謙虚である。日本語の低姿勢という言葉に対して、中国では、謙虚な姿勢を「高姿勢」という。世界を見渡す、自己の足りなさ、他者のよさが見える。人格の立脚地が高いともいえる。高いところに立っているので、いくら自分自身へりくだっても、他者に見下されることはない。井底之蛙とは、人格の低さを意味する。立脚地が低いから、いくら自己を高く見せても、客観的に見れば、低い。

(3) 部下への暖かい信頼

劉備が三回出向いた行為、身を落とす姿勢は無言のままにメッセージを伝えている。孔明に対する暖かいまなざしと信頼、謙虚な人柄、すばらしい人間性はその過程の中に言葉を超えて孔明のなかにしみ込んだ。孔明は礼に大いに感激して、決意して、歴史の表舞台に登場する。そして孔明劉備の「三顧の礼」を「三顧の恩」として受け止め、死ぬまで、劉備への忠誠を尽くした。出師表のなかの「鞠躬尽瘁死而后已」という言葉は死ぬまで忠誠を尽くすという意味合いで、定形語として今もよく使われるが。孔明の場合は、「死諸葛能走生仲達[10]。(死んだ諸葛は能く生ける仲達を走らす)[11]」というエピソーとに見られるように死んだ後までも忠誠を尽くし続けたといえよう。

第4章 劉備は英雄なのか

1 曹操に見られる「英雄」

劉備は、呂布に敗れ、徐州を追われ、曹操の元に走った。曹操は手厚く劉備をもてなした。「出則同與、坐則同席[12]」

曹操は劉備を豫州の牧に任命し、左将軍にした。劉備は裏庭で野菜つくりに精を出す日々を送った。彼は自分を凡庸な者と偽り、曹操の目をごまかそうとした。しかし、曹操は誤魔化されなかった。

有名な「青梅煮酒論英雄」は、曹操の劉備観をよく表したエピソードである。『三国演義』に次のように描かれている。

ある日、曹操は劉備を招いてお酒を飲む。

八一

操執玄徳手、直至後園、曰“玄徳学圃不易！”(中略) 操曰：“適見枝头梅子青青、(中略) 又值煮酒正熟、故邀請使君小亭一会」

(曹操は玄徳の手を取って、そのまま後園まで連れてきて、「玄徳、畑

の仕事でお疲れでしょう」（中略）

「実はさっき梅の枝に青々とした実のついているのをみて、（中略）仕込んだ酒も飲み頃なっているので、貴公をお招きして、あの亭で一献さしあげようと思ったのだ）

今英雄と呼べるのは誰かという話になった。劉備が当時英雄といえそうな人の名前を挙げると、曹操は一人一人理由を挙げて否定した上で、最後にこういった。

“今天下英雄、唯使君（劉備）與操耳！”

玄徳聞言、喫了一驚、手中所執匙箸、不覚落於地下。時正値大雨将至、雷声大作。玄徳従容附首拾箸曰：“一震之威、乃至於此。”操笑曰：“丈夫亦畏雷乎？”玄徳曰：“聖人迅雷風烈必変、安得不畏？”将聞言失箸縁故、軽々掩飾過了。

「当今、天下の英雄と申せるのは、貴公とこのわしだ」

その一言に玄徳ははっと息を呑み、手にしていた箸を思わず落とした。このとき、雷鳴大地を貫き、沛然たる豪雨になった。玄徳は悠然と箸を拾い上げて、

「一震の威に、これほどの醜態をお見せしました」

曹操は笑った

「大丈夫たる者でも、やはり雷が恐ろしゅうござるかの」

「聖人すら迅雷風烈必ず変ずと申されております。恐れずにおられましょうか」

玄徳はこう言って先の曹操の言葉で箸を取り落としたことを、軽くそらした[13]。 八〇

このエピソードは、歴史の事実に基づくものである。「三国志・先主伝」

に次のような文がある。

「是時曹公従容謂先主曰：“今天下英雄、唯使君（劉備）與操耳！先主方食、失匕箸」（「三国志・先主伝」）(14)

このエピソードは『三国演義』の文学的な表現においては味わいが深い。劉備を呼んで、「畑の仕事でお疲れでしょう」という親切な挨拶をしながら、その手を取って、そのまま後園まで連れてきて、「青々とした実のなる梅の木」の下で「飲み頃なっておる仕込んでおいた酒」を出し、微笑みながら、劉備としゃべる曹操の姿には、しみじみと劉備へ敬愛の気持ちが感じられる。さらに、話の中の英雄論に、劉備を時代の英雄の第一人者と重んじる心情をはっきり表している。その話に、驚きのあまりに、劉備は手に持っている箸をも取り落とした。その場で雷のせいと誤魔化したが、まもなく、劉備は曹操のところから逃げた。

劉備を逃したことは、曹操の人生の中での最も大きな過ちだと考えられる。実は、その前、部下は何回も劉備の危険性を警告していた。曹操はそれを知りながら、部下に助言されるとおりに、劉備を殺すことができなった。ここには『三国演義』を読解するに大きな謎が残されている。なぜかというと、「寧教我負天下人，休教天下人負我」という曹操の名言に表されたように、曹操は、目的を実現するためには、自分が天下のすべての人を裏切ってもかまわないが、天下の人の中の一人でも自分を裏切ることは許さないという処世の原則を持っている。なのに、曹操は劉備を殺さないばかりか、劉備に逃げられてしまう。結局、曹操は自ら劉備に自分を裏切る道を用意した。このあたりは、従来諸説紛々である。私は、ここには曹操の人を見抜く眼力と英雄を大事にする誠実さを見る。そしてまた英雄曹操のまなざしに反射された劉備の英雄としての真実さが伺えると思う。

曹操は英雄真偽を鑑別する眼力は鋭い。いったん英雄として見定めると、その人を正直に愛する。味方と敵の関係、功利的な打算などを超えて愛する。これは冷酷な政治家といわれる曹操の弱みだとも言える。自己に対抗する力になることを知りながら、真の英雄を殺すに忍びない。曹操の英雄を愛する誠実さは『三国演義』のいくつかのエピソードに見られる。関羽も趙雲もその英雄を愛する誠実さに生かされた。またこの劉備も。このシーンに、英雄を見抜いた曹操と真の英雄である劉備が映しあいながら浮き彫りになっている。

2　周瑜の警告

周瑜も劉備に出会うとき、危険な敵として劉備を警戒し、

「劉備乃人傑也。今不打必成後患。」(15)

「劉備は人傑也。今打たずんば、必ず後の患いとならん」(16)

「梟勇（勇傑な人物）之姿」(17)

「恐蛟竜得雲雨終非池中物也」(18)

（蛟竜は雲雨をえば、ついに池の中のものにあらざらん）(19)

などの警告を常に発する。周瑜は死ぬまで、繰り返して、劉備を国の危険な敵として殺そうとした。

3　英雄とは？

英雄の語源の解釈は次のようである。「草之精秀者為英、獣之精秀者為雄、人之文武茂異、取名与此（草の精秀のものは英という。獣の精秀のものは雄という。人間の文武の才能の特に優れた人物は英雄と名づける）」

七八

すなわち、英雄とは、文武の才能の特に優れた人物。実力が優越し、非凡な事業を成し遂げる人物である。

しかし、今まで述べてきたとおり、劉備には、文武に特に優れた人物で

もない。非凡な事業を成し遂げる人物でもない。なのに、なぜ、みんなに英雄として見られるのか。曹操の英雄観を借りてみよう。

「大英雄者、胸懐大志、腹有良謀、有包蔵宇宙之機、呑吐天地之志者也[20]（英雄とは、胸に大志を抱き、腹中に優れた謀略を秘め、宇宙を包蔵する機と天地を呑吐する志を有する者である」[21]。曹操は、劉備がそういう英雄の条件を備えていると思っていたらしい。確かに、劉備には、英雄の「志」、英雄の「義」、英雄の「胸」があるからである。それらは内面化された「義」を元にして、劉備に、英雄の気配をもたらしている。「弘毅寛厚」（『三国演義』の言葉）、「弘雅有信義」（『三国志』の袁紹の評価）という。それらは言葉を超えて人々に感じとられる。関羽の「千里走単騎（千里を単騎で走る）」、「過五関斬六将（五関に六将を斬る）」・趙雲の「肝脳塗涂地」・孔明の「鞠躬尽瘁死而后已」など部下たちが劉備にささげた並々ならぬ忠誠と、曹操の「青梅煮酒論英雄」・周瑜の「恐蛟竜得雲」など、ライバルである人々の劉備に対する並々ならぬ警戒などは、劉備の人格的な力を間接的に現している。このようにして、劉備の姿と劉備を取り巻く人々のまなざしの間に、読者に一つの空間的な余裕を与える。読者のまなざしは劉備と劉備を見る人々の空間に往来しているうちに、自ら英雄である劉備の人間像を作り出していくのである。

第5章 「義と利」二者択一の中での劉備

「重義軽利」（義を重んじ、利を軽くみる）「見利忘義」（利のために義を忘れる）と言う言葉に表されるように、義を重んじる儒教倫理道徳観で、義と利は君子〔人格が立派な人〕と小人（徳・器量のない人）の試金石である。常に義と利の二者択一の中に義の高さを測り、義の真実さを確かめる。

「義と利」の二者択一に直面させられる人生の数多くの場面において、

劉備は迷わず義を選ぶ。選ぶたびに利の面に大きな損害をもたらす。しかしそのところにこそ、劉備の義のレベルの高さが示され、劉備の人格はいっそう輝いてみえるのである。

1　長坂の戦い（208年）

出来事はやはり劉備が荊州の劉表のところに身をゆだねたときのことである。

荊州は現在の湖北省と湖南省を合わせた地域に相当する。荊州（九郡）は長江流域の中心地にある広大な穀倉地帯で、交通、軍事の要衝である。北に漢水があり、南に交州があり、4千里四方に広がり、重武装兵二十八余万を擁する。

荊州刺史の役所は長江中流の要衝襄陽に置かれ、190年以来この地を治めたのは漢皇室の血をひく劉表であった。戦乱に明け暮れた当時にあって、荊州は唯一例外と呼べるところであった。劉表が天下とり争いという権力争いに巻き込まれぬよう勤めたからである。

しかしそれはとうとう不可能になる。曹操も劉備も孫権もほしいところである。三英雄共の争奪の的となった。

先に行動したのは曹操である。中原を制覇した曹操は50万の兵を率いて、自ら全軍の指揮を執り、荊州へなだれ込んできた。曹操は三万の軍勢を曹仁に与え，樊城を占領させる。目的は「虎視荊襄就探看虚実[22]（荊州をうかがわせ、かねて内情を探る足がかりとする）[23]」ということである。そのとき劉備は新野の守りについていた。劉備は樊城で曹操の軍を破り、樊城を取り戻した。

「この新野は小さい県なので、長く居座れるような場所ではない」と、孔明は劉表が危篤の際に乗じて荊州を乗っ取って支配権を奪い取るように勧めた。「荊州を得れば、曹操と対抗することは十分可能だ」というが、

劉備は劉表の厚恩を受けている身。「奪い取るのは忍びない」と首を縦に振らない。「後で後悔しても追いつかない」と孔明が言うと、劉備は「いいや、私は死んでも、義に背くことはしたくない」といい、その策を拒否した。

曹操が新野に攻めてきたとき、劉備は新野を空け曹操軍が入ると火攻めで、それを破った。劉備は人民を連れて樊城に行く。新野の人民を樊城に移した。そのとき、劉表は荊州を劉備に譲ろうとして、「私が死んだら、君がこの荊州を治めてくれ」と劉備にいったが、劉備は断った。

劉表の死後、後継者劉琮は無条件投降し、荊州の九郡を曹操に引き渡し、襄陽を無血開城した。このとき、荊州構内に、曹操と対抗するのは、樊城の劉備だけであった。

「弔問を理由に襄陽まで進まれ、劉琮を誘いだし、襄陽をとる」ように孔明などに勧められたが、劉備はそれを断る。

曹操は五十万の兵を率いて、八路に分け、樊城に押し寄せてくる。「催動三軍、漫山塞野」、まさに山野を埋め尽くすような勢いである。樊城を攻めつぶしてしまう。曹操は劉備に手紙、投降しなければ、「軍民共戮、玉石共焚（兵士も人民も区別なく殺してしまう）」と。

劉備は樊城を捨てて、江陵にいくことにした。そのとき、新野、樊城の人民は声をそろえて、「我らは死んでも劉使君に従います」といった。

当時の江陵は要衝としてしられ、大量の軍需物資が蓄えられている。

曹操側は江陵は荊州における要で、資金、食糧共にきわめて豊富なところ。劉備がここを抑えると、つぶすことは困難と見ていた。

七五　劉備の側からしても江陵は荊州における要害地のひとつ。根拠地として敵に対抗できる地と見ている。

このときの曹操は劉備が江陵に入るのを一番恐れていた。曹操は各部隊から精鋭部隊５千を選び、三百里で、一日一夜を持って劉備に追いつけと

命じる。目的は劉備が江陵へ行く退路を断ち、劉備が江陵に行く前にそれを叩き潰してしまう。

このとき、劉備の徳を慕う住民が後に従い、続々と後に追ってきた。やがてその数は10万人以上にも膨れ上がった。進軍の速度が大幅に鈍った。

衆将はみんな言う。

「江陵は要害地のひとつですから、敵軍に対抗することも可能です（中略）とりあえず人民は置いて、われわれが先行すべきであると思います」

しかし劉備は涙を流しながら、

「挙大事者、必以人為本。今人帰我、奈何棄之。」[24]（大事を起こす者は、必ず人を以て本と為す。今、人は我に従ってくれるのだ。どうして見捨てられよう）[25]

このところに、『三国志』での劉備の答えは次のようである。

「夫済大事、必以人為本。今人帰吾、吾何忍捨去。」（夫れ大事を済すには、必ず人を以て本と為す。今人吾に帰するには、吾何ぞ捨て去るに忍びんや）（『三国志』蜀書・先主伝）[26]

この『三国志』の「夫済大事、必以人為本」という言葉に理性的な思考のニュアンスを感じられる。『三国演義』の表現に、さらに次のようなドラマ的な一節を加える。

進軍途中、突然、一陣の強風が吹き、劉備の馬前をかすめるようにして塵を天にまで巻き上げた。占いに通じる部下は、「これは大凶のしるし。それも、災難が今夜降りかかると出ているので。人民を棄て逃げるべきだ」と。劉備に警告した。

「百姓従新野相随至此、吾安忍棄之[27]（しかし、人民は新野からここまで従ってきてくれたのだ。見捨てることに忍びない）[28]」劉備はせっかく新野からついてきた人々を見捨てるには忍びないというのだ。さらに部下

に「もし見捨てずにおけば、禍は避けられません」と警告されても、劉備はやっぱり、人民を見捨てることができなかった。劉備の感情のおのずからの流露を感じさせる。「義と利」の二者択一の中での劉備の選択の非理性を浮き彫りにする表現である。

結局午前二時ごろ、曹操の精鋭部隊5千人が、長坂で、ついに劉備に追いついた。劉備軍はさんざん蹴散らされてしまう。人民たちは全員行方不明になり、劉備自身も、妻子を捨てて、かろうじて何とか逃げのびたのだった。

「十数万の人民が私を慕ってついてきたために、こんなひどい目にあうことになった」と、劉備は、慟哭した。

このあたりは劉備という人の持ち味が伺える。それは日本語で、思いやり、心の温かさ、あるいは暖かい配慮といってもよいが、実はもっと深いものがある。それは内面化された義、劉備の感覚の隅々までに浸透された人民への深い愛情である。それは劉備の理性を超えて劉備を動かす。それがあればこそ、人民の苦しみに痛みを感じ、自己の利益のために人民を苦しませるに忍びない。中国語では、「忍」とは、刃と心である。心の上に刃物がある。心が刃物に刻まれることに耐えることを意味する。劉備の話に伺えることであるが、人民の心に傷つけることに刃物で心を刻まれるほど痛みを感じて、その痛みに耐えられないとのことである。

人民への深い愛情は劉備の理性を超えて彼を動かす。そのため、戦争の勝負に関係する大切なときに、いつもチャンスを失い、自身が一歩一歩と、絶境に追い詰められる。理性を超えて人民を愛することは軍事指導者としては、弱点だとも言えよう。

この長坂の戦いは曹操軍の一方的な勝利に終わった。劉備は絶体絶命の窮地に陥ってしまう。利の面で言えば、劉備の大きな損失としかいえない。大敗戦であった。人民をも自身をも救うことができなかった。

敗走を余儀なくされた劉備であるが、敗走してまで、人民への情を貫いた。劉備が部下や人民から慕われたもっとも大きな理由は、ここにある。自己が絶境に追い詰められてもなお人民を、他者を愛する心が失われないところである。その利の面の損失にこそ、劉備の人格の色彩が輝いてみえる。

後世の人は詩を作り劉備をたたえている。

臨難仁心存百姓　登舟揮涙動三軍　至今憑弔襄江口　父老猶然憶使君[29]

（難に臨むも仁の心は百姓を存す　舟に登り涙揮って三軍を動かす　今に至るも襄江口を憑弔すれば　父老は猶然として使君を憶う。）[30]

自分が危うくなっても劉備の仁愛の心は人民のことを考えていた。劉備は舟に乗るときも人民を気の毒に思って涙を流し三軍を動かした。現在になっても、襄江の渡し場に向かって、老人たちは依然として劉備のことを憶い続けている。

劉備の心の広さを歌っている。自分の命が脅かされるときにも、劉備の心は、人民を、他者を愛するように働く。

この歌の「至今憑弔襄江口　父老猶然憶使君」という表現は劉備を三国時代という限定された時空から引き出し、三国時代から作者の時代（元末明初）までの千年以上の歴史時空に投影される。千二百年来、劉備のことを憶い続けている人々のまなざしに、読者は劉備の人間像を見る。そして、その人間像に、各時代の読者が読書しているうちに、おのずから自分の生きている時代までの人々の劉備観を加える。そのようにして、儒教文化を主流にする中国の歴史の中に、義の人間として評価されつつある劉備は、具体的な歴史人物を超えて、「義」の化身になる。「義」とは、劉備のイメージによって現されている。千二百年来、中国の人々が憶い続けているのは劉備という人間より、「義」そのものである。

2 関羽の弔い戦

大いなる損害を受けてなおいっそう劉備の義が輝く。そのクライマックスは関羽の死に直面したときである。

208年、赤壁の戦いにおいて、曹操の天下統一の夢をうち破った。赤壁の戦いの後、逃げる曹操の軍勢を追撃して荊州の南部の四郡を占領し、劉備は荊州の群臣から推され、荊州の太守になり、初めて本拠地を持つことができた。210年長江北岸の江陵を孫権から借りた。

劉備においては、赤壁の戦いは、運命の決定的な大逆転である。なぜかというと、根拠地を得たからである。前に劉備には、英雄の「志」、英雄の「義」、英雄の「胸」があると述べた。実は、赤壁の戦いの勝利まで、劉備は時代の英雄になるには一つの肝心の条件を欠いている。それは英雄の「地」である。この「地」がなければ、「英雄無用武之地（英雄は用武の地がない」といわれるように、英雄は時代の英雄として成立することができない。この赤壁の戦いの勝利に劉備は根拠地を得た。

219年孔明、関羽、張飛、趙雲などの部下たちの並々ならぬ努力によって、劉備は荊州、益州、漢中を領有し、漢王朝再興の旗の下に、漢中王に即位する。三国鼎立という局面が成立した。劉備が乱世の舞台に上り、35年、ようやく長い間の悲願を実現する基礎ができた。

孫権と曹操に比較してみれば、今まで、劉備は英雄の「志」、英雄の「義」、英雄の「胸」という面で二人より優勢を持っていたが、二人が持っておる英雄の「地」が欠けていた。今（219年）、劉備は英雄の「地」を得た。すなわち、二人があるものは、劉備にもある。さらに孫権と曹操に欠けているもの、孫権と曹操がどうあがいても手に入れられないものを、劉備はたっぷりもっている。さらに天才の軍師孔明がいる。このまま行けば、劉備は三英雄天下を競う中で、勝ち取って時代のリーダーになったであろう。

三国鼎立といえども、三国の戦力には大きく異なっていた。総合的に見た戦力の比較は、魏－七、呉－二、蜀－一の割合であった。こうした三国鼎立の局面に直面して、孔明をはじめ、群臣とともに定めた蜀の国是は「呉と結んで、魏を攻める」というものであった。これは三国の中でもっとも弱いという蜀の国の唯一の生きる道でありながら、利点をよく活かせば、十分成功する可能性がある道でもある。しかし、人生は劉備に甘くない。着実の努力によって、夢が実現する可能性があるとき、関羽は非命に死んだという意外なことが生じ、劉備は、厳しい試練に与えられる。事件は荊州に起こり、経緯は次のようである。

劉備は主だった武将を挙って蜀を目指し、関羽は荊州に残った。関羽は荊州を拠点にして、魏を苦しめた。曹操は孫権を説得して、関羽を攻撃させた。呉の呂蒙は謀略を掛けて荊州を奪い、蜀の拠点である公安・南郡を守備する糜芳・傅士仁は投降した。関羽は麦城で孫権の軍に囲まれてついに命を落とす。関羽について張飛まで失った。

関羽の死が劉備に与えたショックは、痛切であった。劉備は関羽の死を聞いてその場に泣き倒れた。日に行くたびに、泣いて昏絶した。3日というもの一滴の水も飲まず、激しく泣きつづけるので、衣の襟は涙にぬれ、点々と血のあとまでついたという。

劉備は義弟の死を全心身の痛みで受け止めているようである。中国では、兄弟のことを手足とも言う。劉備は文字通りに、手足をもがれたような痛切な痛みに、自身への理性的な把握を失った。ついに痛みは怒りに転じられ、復讐を決意する。このときの劉備は、もはや、帝王の位など、どうでもよかった。今、世俗的な是非成敗、尊卑榮辱、劉備に意味はない。義兄弟の義を貫いていくこと！義のために生き、義のために死ぬ！これは劉備の全心身の奥底から発した声であろう。「生死をともにしようと誓ったのに、二人弟が死んだ今、おめおめと生きていくことができない」と繰り返

していう劉備の姿には、35年来、誓いを守りつつある劉備の誠実さと内面化された義の深さを感じられる。「わが弟を殺した敵とはともに天をいただかぬ」と、義兄弟の弔い合戦のために、「呉と結んで、魏を打つ」という蜀の国是を無視して、呉を攻撃することを決意した。我を忘れた劉備は、関羽との義のために命をかけた。

蜀が直面していた状況は次のようである。

曹操は関羽の頭を見てから、病気が重くなり、亡くなった。魏は曹操の死をきっかけに弱体化した。さらに、曹丕は献帝を廃して自らが魏皇帝になり、人心を喪失していた。それに対して、劉備は帝位につく。人心を得ており、蜀にとって今こそ、魏を取る絶好の機会である。

劉備はもっとも厳しい利と義の二者択一の選択を余儀なくされた。

① 天下をとるために魏を攻撃し、最大の利を得るか。

② 関羽の仇討ちのため呉を攻撃して、関羽への義を貫くかである。

劉備は②を選んだ。

臣下から反対の声が上がった。中でも、将軍趙雲は強硬に劉備を諫めた。しかし劉備は耳を貸さなかった。趙雲を遠征軍からはずし、群臣の諫めも聞かず、すべてを捨てて、ついに呉の討伐に乗り出した。

劉備は関羽の復讐で、頭に血が上る。それでは、『孫子兵法』の「主不可以怒而興師、将不可以慍而致戦[31]（主は不可以怒を以て師を興すべからず、将は慍を以て戦を致すべからず」[32]）の訓に違反する。この兵法にそむく出発から始めて、劉備の作戦は錯誤だらけである。湿地帯を背に陣を敷くという無謀の布陣であり、また火攻めをさせられる条件を自ら備えた上、火攻めを防備する措置を一切しなかった。そのため陸遜の火攻めにあい、完膚なきまでに敗れ、蜀軍は、雪崩を打って敗退した。劉備は孔明によって救出されたものの、百人ほどの兵に守られて、かろうじて後方の白帝城まで後退した。白帝城に逃げ込んだ劉備は己の無謀さを恥じ、半年近

く成都に帰らなかった。

このように義を貫く劉備の行動が、またもや劉備の集団に大きな損害もたらした。夷陵の戦いは蜀軍の大惨敗に終わった。数万の手勢を失った。諸軍は主だった将軍や有能な文官たちを次々に失った。死者は数万に上がった。荊州以来養った蜀軍の精鋭は、ほとんど壊滅し、蓄えてあった多量の軍需品は、すべて失われていた。劉備にとって悪夢のような敗北であった。劉備自身もそれをきっかけに命を落とした。翌223年4月、劉備は63年にわたる波乱に満ちた生涯を閉じた。義から出発し、義を核にして生まれた劉備の集団は、義によって滅びたといえよう。

では、関羽のために復讐するのはなぜ義であるか。その理由は次のようである。

1　義兄弟の感情の真実さ。

2　誓いを守る

3　味方のために復讐することは、中国文化においては正義である。

この劉備の行動について、次のような評価もある。

「劉備の無謀ともいえる関羽の弔い合戦の強行。情に理性を失った劉備は、最も非という道を選び、愚劣の極みである」、「劉備の攻勢開始論はもはや合理的な戦略思考とは、程遠いものである。義に浸透された劉備が国家指導者の立場を放棄し、兄弟愛を終始する決断を行ったことである」(33)。

このような評価は功利的理で言うならば、正論だと思う。そういう理を劉備は知らないはずはない。しかし、この時、劉備を動かす力は、理性的な思考や功利的な打算ではなく、彼の心身に浸透した義である。たしかに、この行動は、劉備にとって利の面での損失は最も大きい、人生のすべて（天下をとる機会も命も）を失ったともいえる。しかし、義の代表として、劉備は輝き続き、時代を、民族を超えて人々の心をとらえ続けておる。「至今憑弔襄江口　父老猶然憶使君」という明の時代の作者に書かれた歌

は今も通用する。政治家としての能力や軍事指導者の才能は曹操に及ばぬ劉備であるが、今も猶三国志の中最大のファンを持ち、人々に暖かく歌われている。

終わりに

このようにして、劉備は義に貫かれる人生を送った。彼は大志を抱えて人生の舞台上ったが、とうとう大志を成し遂げなかった。

劉備の悲劇的な人生に、始めに述べたような「人生の二律背反」という人生の矛盾がうかがえる上に、儒教の倫理道徳そのものが孕んでいる矛盾も伺える。すなわち、「斉家、治国、平天下」という社会理想と、「仁義礼智信」という倫理道徳の個人的な人格教養の矛盾である。二つとも儒教においての理想的な人格である。この二つの面を同時に持っているゆえに、劉備は英雄でありながら、義の人間である。しかし、生身の一人の人間において、両面ともに成し遂げようとするとき、大きな矛盾が生じ、激しく衝突することになる。劉備の抱える矛盾は、この二つの面の一人の人間の身での衝突である。常に、二者択一の選択を余儀なくされる。それは、三国志のなかで、いつも孔明の進言を受ける姿勢によって現れる。

孔明の進言ははっきり大志を実現する道を進める方向を示している。それは理性では、劉備自身も認める。が、劉備の内面化された義は、理性の働きを圧倒し、孔明の意見は却下されてしまう。結局、夢を実現する道は、義によってさえぎられ、常に捻じ曲げられ、退くことになる。あるいは、逆の方向に向かわせてしまう。

六七

劉備は「大志」を抱えて歴史の舞台に上る。大志とは斉家、治国、平天下という社会理想を実現する。すなわち、天下を取ることである。それは儒教の人格の重要な一面であるが、その大志の実現は常に義を犠牲にすることが要求される。それができなければ、大志は挫折させられる。前に述

べたとおりに、義は劉備の人生を支え、彼の苦境を乗り越える力となったため、劉備はすばらしい人生の道を開いた。しかし、またそれは、劉備の夢への実現の最大の障碍になってしまう。

三国志の中では、劉備と曹操はそれぞれ儒教においての理想的な人格の一面を実現しながら、それぞれマイナスの一面をもったまま、史書に残された。儒教の社会理想と倫理道徳、この両方を伴って人生を貫いていくことの難しさが伺える。

義のゆえに大志を成し遂げられなかった劉備が今も三国志の中最大のファンを持っていることは、劉備の身に注いでいるまなざし、矛盾に満ちた人間の生き方、人間そのものを見つめる確かなまなざしが物語のなかにあるからであろう。

註

(1) 去勢されて宮中に仕える役人。皇帝の身の回りの世話や後宮の管理に当たった下級の役人である。宦官かんがんは、本来政治の表舞台に登場し得ない下級役人である。ところが、皇帝のそばに仕えることから、さまざまな情報をキャッチしたり、また皇帝から相談ことを受けたりするようになる。そこに宦官たちが政治に参加するチャンスが生まれる。

(2) 守屋洋「大三国志」 世界文化社 1995

(3) 功名を立てたり、力量を発揮したりする機会に恵まれない無念さを表すことばである。

(4) 羅貫中著 董宝良校注 金盾出版社 2006年9月 以下漢文の引用は同じ。

(5) 本論の日本語翻訳は、『三国志』立間祥介訳（平凡社 昭和37年11月）と『三国志』渡辺精一訳（講談社 2000年12月）を参考にして筆者の訳である。

(6) 同(4)

(7) 同(5)

(8) 同(4)

(9) 同(5)

(10) 同(4)

(11) 同(5)

(12) 同(4)

(13) 同(5)

(14) 『正史　三国志・先主伝』陳寿
漢文　古籍　吉林大学出版社　1986年5月
日本語訳　今鷹真・小南一郎　ちくま文芸文庫　2007年7月

(15) 蛟竜―想像上の動物。まだ竜にならない蛟（みずち）。水中に潜み雲雨に得て天に上るという。時運に会しない志を得ぬ英雄のたとえ。

(16) 同(4)

(16) 同(5)

(17) 同(4)

(18) 同(4)

(19) 同(5)

(20) 同(4)

(21) 同(5)

(22) 同(4)

(23) 同(5)

(24) 同(4)

(25) 同(5)

(26) 『正史　三国志・先主伝』陳寿
漢文　古籍　吉林大学出版社　1986年5月
日本語訳　今鷹真・小南一郎　ちくま文芸文庫　2007年7月

(27) 同(4)

(28) 同(5)

(29) 同(4)

(30) 同(5)

(31) 『孫子兵法』 孫武
漢文　古籍　吉林大学出版社　1988年5月
日本語訳　金谷治　岩波文庫　昭和38年9月

(32) 守屋洋「大三国志」 世界文化社　1995

六五